

同窓会だより

2018年10月20日

第19号



歴史への畏敬

教育学科同窓会会長 比佐 實

『歴史は、現在と過去との対話である。』余りにも、有名な文言です。

歴史家 E. H. カー（英国 1892-1982 年）は、著書「歴史とは何か（What is History? 1961 年）」の中で、『歴史は、現在と過去との会話である。』を繰り返し論じています（訳者 清水幾太郎氏、「歴史とは何か」1962 年（岩波新書）として出版）。

清水幾太郎氏（社会学者。故人 1907-1988 年）は、「歴史とは何か」のまえがきで、『歴史は、現在と過去との対話である。』の意味・心構えとともに、次のように指摘しています。

“われわれの周囲では、誰も彼も、現代の新しさを語っている。「戦後」・「原子力時代」、「20 世紀後半」……しかし、遺憾ながら、現代の新しさを雄弁に説く人々の、過去を見る眼が新しくなっていることは極めて稀である。過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に掴めないであろう。”（岩波新書）より引用

それから、半世紀以上の時間が経過しています。何も掴めていません。「20 世紀後半」が 21 世紀を迎えたことのみ。「戦後」・「原子力時代」は、いずれも未解決のままです。要は、“過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に掴めない”ということです。

今・現代の新しさとは何か。グローバル、IT・AI、地球社会共生等の現象が蔓延しています。客観的認識にいたることができるのか。これを超えることができるのか？ M. ヴェーバーの方法的概念である理念型（Idealtypus）を持ち出すまでもありません。この時代・この社会に生きる私たちにつきつけられた課題・使命です。

※元青山学院大学教授 清水禮子氏（故人）は清水幾太郎氏のご令嬢。

CONTENTS

会報第19号

巻頭言 歴史への畏敬（比佐 實（'73））	...	1
A I 時代の教育（学）（教育学科教授 野末俊比古）	...	2
2018年度教育学科同窓会主催講演会録	...	3~7
講演会の感想（戸田美紀子（'69））	...	8
クラス会報告（浦上 義夫（'59） 島 光洋（'61））	...	8
わたくしの今… —皆さんの三行消息—	...	8~11
会費納入一覧	...	11
2018年度（第19回）総会報告	...	12



野末 俊比古先生

本年度も大学同窓祭(9/23)に出店しました！

当日はお天気も良く、「バナナ」「お花」「お茶」「雑貨類」の販売をすることができました。お手伝いに賛同して下さった皆様、そして当日、足を運んでくださった同窓会の皆様、ありがとうございました！！
（竹田 治世）



AI時代の教育（学）

——シンギュラリティをめぐる雑想——

教育学科教授 野末 俊比古

シンギュラリティ（技術的特異点）とは、**AI**（人工知能）が人類の知能を越える時点を指す概念である。一般に**2045**年ごろに達すると言われている。コンピュータが人間を支配する**SF**的な世界がイメージされるかもしれない。コンピュータは人間が命令を与えて動くものだから、人間が適切な命令を与える限り、そうした世界は訪れないという見方もあるが、残念ながら安心はできない。本学シンギュラリティ研究所が主催した講演会に登壇した中島聡氏——氏は**windows95**の開発者として知られており、現在は自動運転の企業経営などを手がけている——によれば、シンギュラリティがもたらすのは、人間が理解できない仕組みで動く**AI**を、**AI**自身がつくり出す社会である。人類を越える知能を持った新しい生命が地球上に誕生するという捉え方が正しいかもしれない。

だからこそ、人類と**AI**がどのように「共存」するのが大きな課題となっている。もっとも、私たちの知能では新しい**AI**を理解することはできないので、極論すれば、シンギュラリティを迎えた社会を私たちは想像（あるいは創造）することは難しい。したがって、中島氏のいうとおり、重要なのは「プレ」シンギュラリティの社会をどうつくるか、人間がどう生きるかであろう。まさにいまここからの社会・人間のあり方が、来たるべきシンギュラリティを迎えた社会・人間のあり方を決めるのである。

望ましい社会・人間のあり方について考えるためには、理工系（だけ）でなく、文科系の「知」が必要となる。人文・社会科学における総合科学である教育学ももちろん含まれる。

学校の授業における教師を例にとりて考えてみよう。教師は、子どもたちの言動・表情などから、理解度はもとより、興味・関心、感情・心理などを読み取って、説明の仕方を変えたり、新しい資料・問題を用意したり、といった柔軟な指導を展開する。しかし、臨機応変な指導は、もしかすると**AI**のほうが得意かもしれない。優秀な大勢の教師たちが過去に蓄積してきた知識・経験（集合知）を「学習」（ディープラーニング）した**AI**は、人間では考え及ばないような、人間よりも適切な指導ができるかもしれない。

あるいは、**VR**技術などの進展・普及を前提とすれば、学校に行かなくても、自宅でもどこでも好きな場所でバーチャルな「教室」の「授業」に「出席」して“**AI**教師”の指導を受けられるようになるかもしれない。教師（人間）ひいては学校（物理的空間）は役割（の多く）を失うかもしれない。さらにいえば、**AI**という「外部知能」が身近にあるならば、そもそも人間自身が学び、考える必要自体が（少）なくなるかもしれない。

むしろ現実はそのなかに単純ではない。しかし、私たちはいま、教師や学校、さらには教育（学習）すら不要になるのではないかという問い——現時点ではあくまで「可能性」であるが——に対して、明確・明快に答えることができるだろうか。かかる問いに答えるためには、さらに根源的な問い、すなわち「教師とは何か」「学校とは何か」「教育（学習）とは何か」といった問いに対する答えを持っていることが必要であろう。“次の時代”において（も）通用する答えを私たちは持っているといえるだろうか。

“そのとき”が来てから考えるのではおそらく遅い。答えを考えるために残された時間は意外と短い。そもそも、古くて新しいこれらの問いについて考えることは、将来のためというよりも、いまこのときの教育をよりよいものにするために必要なものであるはずである。大げさかもしれないが、**AI**が教育学（ひいては人文・社会科学全般）にもたらすものは、学問の「原点」に立ち戻ることかもしれない。

（プロフィール）

のずえ・としひこ 2000年より青山学院大学に勤務。専門分野は教育情報学・図書館情報学、関心領域は情報リテラシー教育。本年度から本学に設置されたシンギュラリティ研究所において「近未来の図書館と新しい学び」研究プロジェクトのリーダーも務める。



とき : 2018年5月12日(土) 14:30~16:30
ばしょ : 青山キャンパス総研ビル9階 第17会議室

歴史の狭間に埋もれた教育界の偉人

～フリッツ・カルシュ (1893-1971年)～

東京医科歯科大学名誉教授 若松 秀俊



◇ 若松秀俊先生のプロフィール ◇

システム工学者。専攻は生体機能支援システム工学で、「脳低温療法の自動化を進める機器システムの研究・開発」が専門。また、「情報ネットワークを用いた介護から救急医療にいたる遠隔医療福祉システム」の研究・応用にも従事
横浜国立大学工学部電気工学科卒業・同大学院工学研究科修士課程修了
東京大学大学院工学系研究科より工学博士の学位取得
現在は東京医科歯科大学名誉教授・中国武漢地質大学システム制御学客員教授
松江観光大使

[講演会に向けて]

2018年度の教育学科同窓会の講演会は、講師に若松秀俊先生（東京医科歯科大学名誉教授）を招き開催されました。テーマは、『歴史の狭間に埋もれた教育界の偉人～フリッツ・カルシュ（1893-1971年）～』。1925年（大正14年）から14年間にわたり、松江（旧制松江高等学校 現島根大学）で教鞭をとられたドイツ人学者・教育者のストーリーです。

私は、カルシュの存在を若松先生の著書により知りました。ドイツ人カルシュと松江との関係を知ることはもちろんですが、それ以上に、松江を第二の故郷と称したカルシュの生き方に興味を覚えました。それに、若松先生のカルシュへの関わりについても興味を誘われました。

若松先生は、システム工学者として多岐にわたり活躍されています。ご専門は「生体機能支援システム」で、『脳低温療法の自動化を進める機器システムの研究・開発』の第一人者として、国内外で、学者・教育者としての研究・実践活動をされ、また、『情報ネットワークを用いた介護から救急医療にいたる遠隔医療福祉システム』の研究・応用にも取り組まれています。

この専門領域に加え、教育及び文化的領域等の研究活動も積極的です。教育的領域では、東京医科歯科大学で将来の医療を支える大学院学生のため、過去18年間にわたり、「仁術は人間性から」という信念のもと、総合講義を通して広範囲で高度な一般教養を導入し、実践されました。また、旧制高等学校教育と現在の大学教育との比較研究を行っています。

そして、文化的領域として、今回のテーマであるフリッツ・カルシュに関わる活動があり、1999年以来、長きにわたり調査・研究に携わり、その成果を著書、講演会等で精力的に紹介しています。

講演会では、約20年にわたるフリッツ・カルシュの調査・研究の成果を踏まえ、出会いから今日に至るまでの足跡を辿ります。

若松先生は、ご出身（福島県いわき市）、ご専門ともに、松江・カルシュとの接点は全くありません。無縁の存在です。その若松先生を、カルシュの調査・研究へと突き動かしたのは、若松先生の学問に対する情熱と真摯な姿勢、そのものであると理解しています。

（比佐 實 経済学部 1970年卒・教育学科 1973年卒）

今回のフリッツ・カルシュに関わる講演内容は、教育学科同窓会が、若松先生の講演・新聞記事・著書等を参考に取りまとめました（文責・比佐 實）。

なお、掲載された写真は、すべて、若松先生より提供していただきました。

はじめに

若松先生は、カルシュについて、様々なエピソードを交えて紹介します。



ドイツ人哲学者“フリッツ・カルシュ博士”（写真・1893－1971年）は、1925年から14年間にわたり、旧制松江高等学校（現島根大学）で教育に力を注ぎました。彼は学者・教育者であるとともに、日本の哲学や宗教の研究者であり、1940年から5年間は外交官でもありました。

彼の薫陶を受けた著名人には、放射線医学が専門で『長崎の鐘』の著者としても知られる永井隆、免疫学の奥野良臣などの医学者、政治家の赤澤正道、福永健司、細田吉蔵などの政治家、『暮しの手帖』で知られる花森安治の名前も見られます。また、当時の朝鮮、台湾からの生徒で、戦後に故国の復興に尽力した有能な医師、技術者なども含まれ、その他、文学者、法律家、外交官など枚挙に暇がありません。（敬称は略させていただきました。以下同じ）

また、カルシュには、多くの哲学者（三笠宮崇仁殿下、西田幾太郎、鈴木大拙、高橋敬視、長屋喜一）との交流についても確認されています。

カルシュは、学者・教育者としての功績は言うに及ばず、専門著書・関連著書、それに数多くの優れたパステル画、歴史的写真など、膨大な未整理の研究原稿を残しています。しかし、カルシュの存在は、戦中・戦後の混乱の中、地元松江の人々にも知られず、歴史の狭間に埋もれたまま現在に至っています。同じ松江でよく知られているラフカデオ・ハーン（1850－1904年）と並ぶ功績を残しているにもかかわらずです。

若松先生は、カルシュについて、その足跡が広く多くの方々に知られることを念じ、1999年以来、日本国内、ドイツ及び米国で調査・研究活動を行っています。

カルシュとの出会いと研究の契機（きっかけ）

若松先生は、カルシュとの出会いを語ります。

現在、カルシュの調査・研究を始めてから約20年になりますが、それまでには多くの偶然が重なりあう中、ある出会いがカルシュ研究へと駆り立てることとなりました。

それは、若松先生がドイツ学術交流会奨学生（エルランゲン・ニュルンベルク大学研究員）として渡独（1973年－1975年）してから約四半世紀後に、カルシュの遺族との出会いがあったことです。1999年、シュトゥットガルトのフリーデン広場にあるホテルで、カルシュの次女フリーデルン（日本名ヒデコ）との間の偶然の小さなできごとから始まりました。朝食時の僅か5分間ほどの会話、そして、そのとき手にした彼女の連絡先を記すたった1枚の紙片の存在がすべてでした。

人を運命づける宿命的な出会いということでは、カルシュと松江（日本）の出会いも、思いがけないものでした。それは1911年（明治44年）、ドレスデンの万国博覧会のときに出会ったラフカデオ・ハーンの著書から得た日本についての知識からでした。カルシュは、松江に『神々の里に見た美と安らぎ』の場を感じたようです。

調査・研究をもとにして得られた膨大な資料と写真から、カルシュの当時の生活や生徒との交流はほぼ再現できましたが、調査を始めて間もない頃に協力してくれたカルシュの愛弟子はほとんどがすでに他界しており、彼らの残してくれた言葉や手紙をときに思い出す、と若松先生は語ります。

ドイツの文化と風土に、若き日に触れる機会をドイツ政府から与えられた若松先生が、シュトゥ

ットガルトの小さなホテルで、カルシュの次女に偶然に出会い、このような調査・研究に携わることになったのは、自分に賜った天命 (calling) と考え、顕彰に尽力してきたとのこと。若松先生のカルシュの調査・研究に対する考え・姿勢が現われています。

カルシュと松江

さらに、若松先生はカルシュと松江について言及します。

今から 100 年以上も前の 1910 年代、ヨーロッパは大きな戦乱が相次ぎ、人心は荒廃の域にあり、また、急速に発展しつつあった自然科学の成果がもたらした物質崇拜の風潮が全土を覆っていました。カルシュの故国ドイツも、その例外ではありませんでした。1925 年、その中で、深刻な失業の苦しみと社会不安が渦巻くドイツ・マールブルクから、一組の夫婦が、昔ながらの生活を営み、都会とは全く趣を異にする松江の地に、旧制松江高等学校（現島根大学）の外国人教師として足を踏み入れました。これが、カルシュと松江の関わりの始まりです。



カルシュは、松江市奥谷町の「官舎」(左写真) に居を構え、ここを拠点として、松江はもちろんのこと、日本固有の自然と文化 (生活) に触れ親しみ、愛し、その美しさを説くこととなります。2、3 年で帰るはずが 14 年にも及び、松江が第二の故郷にまでなりました。

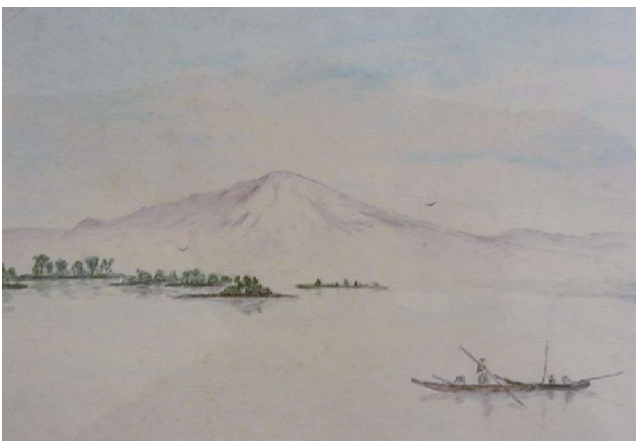
カルシュが住んだその「官舎」に、一時、取り壊しの決定がなされました。しかし、地方新聞社との共同の保存呼びかけが文化財登録への道を開き、2009 年 10 月に、保存・修理の運びとなった経緯があります。カルシュの存在が、調査・研究の進展とともに、報道機関・松江郷土館の企画展示会・日独協会の顕彰記事もあり、世の中に知られるようになりました。それが、NHK 松江放送「しまねっと：ドイツ人の住宅を保存へ」と進展し、島根大学による文化財

登録の申請となったものです。そして、今、その「官舎」は、歴史的価値とともに、『記念館』としても、その役割を果たしています。やがて、カルシュの遺品 (膨大な哲学の未発表原稿、写真、絵画、調度品など) も、広く世に公開できるものと期待されています。

松江での生活と学校 ―自然との共生・近隣との共生・神々との共生―

若松先生は、カルシュと松江についての言及を続けます。

カルシュは、ヨーロッパとは異なる異質の文化に対する知識と異国への憧れとともに、松江での生活を享受することとなります。カルシュは、「官舎」で家族とともに安らぎを覚え、ドイツとは全く異なるやわらかな雰囲気 (ただずま) いが残る松江の町並みの中で、近隣の人々との密な交流・生活を楽しみました。そして、ここ松江で、象徴的な多くの歴史、自然の事象に遭遇すること



(写真はカルシュ自筆のパステル画「枕木山から望んだ大山」)

になります。松江城、神社仏閣等の歴史に触れ、近隣の山々を訪ね、慣れ親しんだ枕木山からは夕日に映える陸と海を瞰望し、朝日山からは宍道湖大山、隠岐島への眺望を楽しみました。そのことは、カルシュの言葉に、次のように表現されています。「この出雲の国の老木鬱蒼たる神社仏閣の美しさ…、海―入江―島嶼 (とうしょ) …さては遥かに淡く輝く隠岐の国の山々を配して青く透き通った日本海の美しさ。それはもう、何にも例えようのない美しいものなのです」。ハーンにより知った東洋の神秘と、ヨーロッパには存在しない価値の多様性に神々との調和を、松江

で経験したことがカルシュにとって重要であったのです。このように、松江の美しさに魅せられたカルシュは、当時の生徒に語りかけます。「こんな風光明媚な地で勉強できる諸君は幸せである」と。

学校の講義、生徒との対話では、ヨーロッパの精神を伝えるために、自らの学問的立場を踏まえ、西洋と東洋の文化の比較を、出雲地方のそれ（伝統・歴史への敬虔さと深遠な品格を備えている）を通して行っています。カルシュがこの境地に至ったのには、彼が子供の頃、大山に似た景色を何度も夢に見たという、大山との終生の因縁が関係しているように思われます。そして、講義の中で、生徒に語りかけます。“西暦 2000 年頃、ヨーロッパ文明が自己矛盾から、他との軋轢が各所で生じる”という注目す



(写真は松江高等学校で撮影されたカルシュ父娘と生徒たち)

べき記録を見ることができます。同時代の歴史家 オスヴァルト・シュペングラ（ドイツ）やアーノルド・J・トインビー（英国）も同様な認識（歴史を相対化する）を有していましたが、この時代に、生徒に向けて語られたことに、カルシュの意義を見出さざるを得ません。

何よりもカルシュにとっては、近くの神社とその雰囲気、彼の自然観・人間観・歴史観に、それに思索に直接的な影響を及ぼしていたようです。これが、カルシュの講義、生徒との対話（かかわり）に滲み出ている思いがします。

現代日本の教育への影響

若松先生は、カルシュの影響について、ルドルフ・シュタイナー（1861 年－1925 年）との関係で言及します。

カルシュは、現代の教育に大きな影響を及ぼしている人智学と哲学者シュタイナーを日本に紹介した大きな功績があります。一般的には、戦後に紹介されたと言われていますが、1925 年に来日したカルシュ夫妻が交わした 1923 年当時のシュタイナーに関するノートが現存し、スイスのゲーテアヌムのシュタイナー信奉者同士の交流も確認されています。シュタイナー思想の流布については 1934 年を境にヒトラーによって禁じられましたが、カルシュが、密かに日本国内で、広めていたことが知られています。

戦後、これが復活して、日本でもシュタイナー学校が創られ、最近では一貫教育の象徴となっており、教育史上、カルシュは、重要な位置を占めています。現在、長女メヒテルトは、米国でシュタイナー教育の中心的役割を担っており、次女フリーデルンは、戦後のシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）出身で、マールブルク大学で政治学、地理学の 2 つの学位を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校で、シュタイナー教育に永年携わり、現在も、継続的に活動しています。そして、直接彼女から二代にわたって教育を受けた日本人にも辿りつくことができるほど、カルシュの影響の拡がりを見ることが出来ます。

カルシュの周辺

若松先生は、カルシュをさらに理解するためには、カルシュの関係者（親類縁者等）についても言及する必要があると語ります。

その一人に 1937 年、ショパンコンクールで入賞したピアニスト・チェンバリストのエディット・ピヒト・アクセンフェルト（元フライブルグ音楽大学教授）がいます。彼女は多くの日本人弟子を残し、日本国内（草津等）で定期音楽会を催すなど、日本と深い関係にあります。それから、モラクセラ・ラクナータ菌を発見し、現在の眼科学に大きな影響を及ぼした世界的権威のテオドール・アクセンフェルト博士（元フライブルグ大学教授）がいます。また、長女メヒテルトの夫 ヘルベルト・セイント・ゴアールは、「ヒトラーの行動記録（16 ミリ）」を、戦後ミュンヘンでハンス・バウ

講演会の様子⑤

アーから押収・保存し、尋問するなど、歴史的に重要な役割を担いました。(それは、現在、歴史的に重要資料として、ベルリンの博物館に厳重保管されています)。ところで、ヘルベルトの祖先のラツァルス・セイント・ゴアールは、約200年前、ライン川流域のセイント・ゴアール市の富豪で市長でした。歴史書には、宗教上の功績から聖〈セイント〉の称号を授与されたとその名が記されています。この他にも、ドイツ最古のエリザベート教会にまつわることなど、カルシュの周辺で、日本との関わりや歴史的な事柄が、多く確認されています。

終わりに

結論として、若松先生は語りかけます。

カルシュは、日本の戦後復興に活躍した多くの著名人を育んだのみならず、90年前の出雲の地や日本各地の貴重な記録を後世に残した功績や、さらに周囲にも多くのことが語り継がれていることを考えると、松江にとどまらず、日本全国に誇るべき偉人です。カルシュが、20年ほどの年月を日本(松江・東京)で、それも政治・社会的に困難な時期を過ごしたなかであって、残した業績は、大いに評価されるべきでしょう。



1968年に、カルシュを慕うかつての生徒が発起人となり、日本に招待したことがありました。教育の荒廃が、各所で叫ばれているさなか、カルシュが、教育者としてラフカデオ・ハーンとは別の教育の見本を残した大きな功績と、生徒と近隣の人々の交流から、彼の存在の偉大さを評価する必要があるとの認識を有しています。

(写真は島根大学にて撮影されたカルシュ先生の歓迎会(1968年10月))

昨年から今年にかけて、鳥取県(米子市)と島根県(松江市奥谷町の記念館:旧官舎)でカルシュの展示会(写真展)が開催され、カルシュの存在が、少しずつ知られるようになってきましたが、今後一人でも多くの人々に知っていただけることを念じています。

また、カルシュ研究(業績顕彰)についても、若松先生は、教育学科同窓会の講演会を終えたこの5月に専門(システム工学)の講演のため渡欧し、ドイツに立ち寄った際に、カルシュの業績顕彰について大学関係者と日独連携等を模索するなど、拡がりを見せつつあります。

講演会のまとめとして、カルシュ紹介番組『松江を愛した外国人教師 フリッツ・カルシュ』(山陰ケーブルビジョン制作。開局30周年記念番組として2017年1月放送)が紹介されました。丹念な取材・内容とともに、カルシュへの認識・理解を深めることができました。(本番組は2018年5月に“CATV中国アワード優秀賞”を受賞されたとのことです。)

若松先生より、教育学科同窓会が『フリッツ・カルシュ』の講演会を開催したことに対して、繰り返し、感謝の言葉をいただいています。末尾ながら以下に添えます。

“今般、教育者“フリッツ・カルシュ”について、青山学院大学教育学科同窓会様からいただきました身に余る講演の機会の栄誉とそのための皆さまの多大なご尽力とご配慮に対して、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。貴同窓会のご発展と、皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。”

※若松先生より、メヒテルトさんご逝去の報をいただきました。ご冥福をお祈り申し上げます。

《Mechtild Maria St.Goar(Karsch).2018年8月15日に天上に旅立ちました。享年90歳》

講演会の感想

若松先生とフリッツ・カルシュ博士

戸田美紀子 (1969 卒)



まるでドイツから日本への貴重なギフト、天からの賜物。にもかかわらず歴史の狭間に埋もれていた教育界の偉人、カルシュ博士。若松先生のご講演に大いに感服した次第です。カルシュ博士の偉大さが十分伝わりました。毎分ごとに「へー、そうなんだ、凄いんだ、頭が下がる」目から鱗が落ちる状態でした。カルシュ博士の最大の功績は教え子たちでしょう。

若松先生には度肝をぬかされました。エネルギーの塊の若松先生から、ご講演中目を離すことができませんでした。工学部ご出身で、数々の治療に関連した医療機器を研究開発されているという。それだけでも筆舌につくせないほどの偉業なのに、運命的な出会いで本来の医療研究とは全く異なった分野であるカルシュ博士についての研究もされた若松先生。

これからの自分の生き方に極上の刺激をいただきました。

若松先生ありがとうございました。

同期会・クラス会の報告

学生時代のことが蘇ってまいります。「同窓会だより」19号でも、紹介させていただきます。

1959年(昭和34年)卒業

傘寿を過ぎたときに、一旦クラス会は終了しようとの話が出ましたが、「今は人生100歳の時代だよ。まだまだクラス会は続けようよ」との声に押され2017年のクラス会も開くことになり、元気な顔が揃いました。

ここ数年は青学会館フィリアでの乾杯が続いております。遠方から駆けつけてくれた方も、久々にお顔を見せた方も、もちろん毎回出席の常連さんもビールやワインのグラスを傾けて再会の喜びに浸っておりました。80歳過ぎの爺さん婆さんたちがまるで子どものように。ひと言近況報告では、皆さんすこぶる前向きです。ネガティブな思考でないところが元気の秘訣かもしれません。

お開きの後は時間に余裕のある方は学院構内の散策です。私たちの在学中にはなかった研究棟や教室棟がいくつも。学部も次々に増え、2019年スタートのコミュニティ人間科学部も含め11学部になるそうです。「入学したころはシェクスピアガーデンという築山があったっけ」「あれはどの辺かな・・・」そんな会話をしながら登録有形文化財になっている間島記念館やベリーホールの姿を懐かしみながらの秋の一日でした。(浦上 義夫)

1961年(昭和36年)卒業

2018年6月13日(水)青山学院アイビーホールにて同期会を開催しました。出席者は26名で、沖縄県、島根県、岡山県の遠方より参加された方もおり、感謝の念で胸がいっぱいでした。

乾杯の後、食事をとりながらの和やかな雰囲気の中、各自一言ずつ話をして頂きました。皆さん、青山学院で学んだことへの感謝、喜び、楽しさ、近況報告等があり、青山学院で過ごした青春の一時を思い浮かべる時間でもありました。その後、各テーブル毎に昔の思い出や、現在の生活のことなど話しているうち、終了時間が近づき、最後にカレッジソングを斉唱し散会しました。

なお、今回をもちまして、同期会は発展的解消とし、以後は、友人どうし連絡しあい、青山学院で育んだ絆を大切に、交流を続けていきたい。

終わりにあたり、今まで、会の運営に携わってこられた幹事の皆さんに厚く御礼申し上げます。

(島 光洋)

※クラス会・同窓会がございましたら、お知らせくださいますよう、お願い申し上げます。「同窓会だより」に、掲載させていただきます。

わたくしの今・・・

— 皆さんの三行消息 —

皆様からいただきましたお便りを掲載しております。

近況をお知らせください。お待ちしております。



歳を重ねて八十路も半ばにさしかかり、無理せず、と心に言い聞かせますが、一方、生きることへの緊張感を覚えております。

木村 昭代さん(越川) 57年
80才を過ぎますと、毎日が無事すごすことが出来るのが最高の幸せです。

野上 富子さん(齋藤) 54年
何せ年が87才になっています。元気なことは元気なので心配無用なのです。皆々様お元気でいらっしやいますように。祈御盛会。

海老原洋三さん 56年
1933年生まれの85歳ですが、お蔭様で息災です。皆様のご多幸とご活躍を心からお祈りいたします。

尾上 悠紀子さん(沼田) 57年

窪田 務さん 57年
心身共に健康年令が気になりアナログ生活をおくっています。「医者に払うより温泉に払え」と各地の温泉巡りで健康を保っています。